

『古典基礎語辞典』小考

平井 吾門

1. はじめに

近世辞書『雅言集覧』と現代古語辞書を比較する一連の調査において、本稿では『古典基礎語辞典』（大野晋編、2011、角川学芸出版）から得られた知見についていくつか取り上げてみたい。「『雅言集覧』の知見が現代にまでそのまま継承されているようなものがあるのか？」を探るという意図ではなく、「現代的辞書の知見が『雅言集覧』にどれほど見られるのか？」という点の確認を重視するものである。

2. 『古典基礎語辞典』の概要と先行研究

『古典基礎語辞典』は特殊な古語辞書であり、古典語を網羅的に理解するためのものではなく、編者が必要だと認める約 3200 語を対象を絞って詳解したものである。元々の編纂意図や編纂経緯については本辞典の「執筆者序」に詳しいので、少々長くなるが当該部分を抄出しておく。

先生（※大野晋＝筆者注）がこの辞書の構想を固められたのは、昭和五十七年の夏頃のことであった。先生は昭和四十九年の末に、心血を注いだ『岩波古語辞典』を世に出されていたが、ハンディな辞書としての制約上、原稿をかなり削ることになり、それを残念に思われていた。そこで、上代・中古の語を対象として、それぞれの項目に分量制限を設けず、自由に必要なだけの内容を記述するという辞書を構想された。収録語数も、『岩波古語辞典』の上代・中古関係の語が二万語であるのに対し、二万五〇〇〇語ほどを念頭に置いていらした。（中略）平成十年ごろから先生が病気がちになられたこともあり、辞書の完成のために、先生は計画の変更を決断された。すなわち、収録項目数を大幅に減らし、基礎語の辞書を作成するという方針転換である。項目数は大幅減となるが、個々の項目については必要なだけの分量を確保することは変わらない。具体的な基礎語としては、『古典対照語い表』（笠間書院刊）において四十一例以上の用例のある一三五三語を中核とし、隣接する語や同一範疇の語とのバランスなどを考慮して語を増やしていった。当時の文化的・社会的な背景を知る上で重要な語、というのも、項目を選定する観点の一つになった。採否の決定は先生が行い、最終的には約三二〇〇語を採録することとなった。（5～6ペ）

この序文に書かれているように、編纂の事情・都合で、所謂古語辞書から基礎語辞典へと軌道修正が図られたわけであるが、その際に「採否の決定は先生が行」ったという所が一つのポイントになる。主要古典における語彙の出現頻度が分かる『古典対照語い表』を指標にして、一定数出現する語を古典語の中核の語として機械的に抽出

し、さらに必要な語を人の手で追加するというのは基本語選定のイロハである。「必要な語を人の手で追加する」には、当然客観性をどのように担保するかという問題が生じるが、そもそも本辞書は大野晋の古代語観ともいうべきものが表れている書物なのであるから、特定の語を取り上げて「この語を基礎語として認定して（収録して）いないのはおかしい」というような批判はあまり意味が無い。紙幅に余裕があれば格別、編集作業や出版との兼ね合いから断腸の思いで語句を選定したことは想像に難くないが、その中で示された語彙全体が「とある学者の考えた基礎語」であるということになる。

大野晋は古典の基本語彙や基礎語彙の認定に長く関わっており、その認定自体が権威を持つものでもある。ただし、その態度が初期から一様だったわけではなく、大野（1956）の研究段階では古典の基本語彙の認定について模索している状況が次のように示されている。

筆者は、いまだ日本古典文学作品の基本語とは、これこれに限るといふ案を得てみないが、次に、さきの代表的作品（※万葉集・枕草子・源氏物語・徒然草＝筆者注）四つに共通な語彙を掲げ、系列の異なる言語の語彙を集めたと見做される類聚名義抄（観智院本）の和訓と照合しその間の一致、不一致を一覧し、基本語彙を考察する一資料として報告する。（39 ペ）

大野晋はその後、『古典対照語い表』も利用して統計的に一連の研究を進めているが、大野（1971）では「仮りに、専ら、使用度数だけによって基本語を選定することとした」（34 ペ）と述べており、態度に変化が見られる。本辞書の収録語彙は、長年にわたって試行錯誤し熟慮した結果であり、約 1350 語の基本語を核に据えて示されたものであり、古典を読み解く上で一定の意味を持つことは疑いない⁽¹⁾。

『古典基礎語辞典』を評したものは、刊行直後の新聞やインターネット上の個人ブログ等を中心にいくつか見られる。カリスマ性を備えた大野晋の編ということもあり、好意的なものが多いようである。雑誌『短歌』（2012 年 3 月号、角川学芸出版）にも『古典基礎語辞典』についての特集が組まれている。それらを概略すれば、古典語の世界・真髄を知るために適した読み物であるという認識のようである。特に、丸谷才一や井上ひさし、大江健三郎、そして近年でも池澤夏樹といった著名文化人によって高く評価されてきたことで、インターネット上のレビュー等ではその言説を根拠として高評価を得ている向きもある⁽²⁾。ただ、大野晋の思想や、その思想を通して古代語の世界に迫っていることに対する感傷的な指摘や無批判の引用にとどまっており、語彙や意味記述の在り方について具体的・学術的に検証したものは見られない。研究論文でもいくつか参照した辞書の一つとして語釈を利用・引用したものは散見されるが、「古典基礎語」の妥当性の検証を含めて、その内実を批判的に検討する類のものはない⁽³⁾。

3. 『雅言集覧』との比較

『雅言集覧』の概要を広く対照させて調査するため、筆者の一連の調査同様、「い」

部を対象として用例の在り方を中心に検討していく。本稿の結論から言えば、語彙と用例に関して『古典基礎語辞典』が『雅言集覧』から影響を受けているというような傾向はほぼ見られないことを確認した上で、『雅言集覧』の用例採集の態度が、長期間にわたって独自に検証された辞書（ここでは『古典基礎語辞典』）に通じる箇所もいくつか指摘できる⁽⁴⁾。

『古典基礎語辞典』における用例の扱いについては「凡例」に書かれており、その選定基準と抄出の仕方に関わるものとしては特に次の二つを抜き出すことができる。なお、取り上げる用例は必ずしも初出例に拘らないという方針は、『岩波古語辞典』（初版）にも見られる。

- ①用例文は、なるべく古い出典から選ぶことを心がけたが、語義の理解を助けることに重きを置いたため、必ずしも初出例とは限らない。
- ②用例文中の〔 〕は、文意が通じにくい箇所に用い、訳語を入れたり語句を補ったりして、文脈が理解しやすくなるように努めた。

『雅言集覧』の用例は、現代の辞書と同様、語義説明に資するものと存在証明を果たしているものと大きく分けられる。『古典基礎語辞典』においては一定数以上の用例がある語が多く選定されていることを考えれば、そもそも存在証明を果たす用例を挙げていくことの必然性は乏しい。すなわち、『古典基礎語辞典』の中で『雅言集覧』と比較できる用例があった場合、「語義の理解を助けるもの」という点から改めて『雅言集覧』の用例を評価することにつながる。

『古典基礎語辞典』の記述は、一つひとつの項目に対して分量の規定を設けないというのが前提ではあるが、実際に用例を含んだ語積の分量は、当該範囲では「いぎなき・いぎなみ」の165行（三段組で一段は31行、一行21文字）が最長である。ただし、この語は他の多くの語句の記述とは体裁が異なり、具体的な典拠は示さずに古代の世界観を広く説明している。これは、「執筆者序」にある「当時の文化的・社会的な背景を知る上で重要な語」に該当するものであろう。古代の世界観を表わすための固有名詞を除いた一般名詞・動詞に関して言えば、「いでく」「いる」「いろ」の記述が比較的長いものの、それは細かくブランチが立てられているためであり、ブランチごとの語積は他の項目同様に長大なものは見られず、むしろ全体としては分量が（一般的な小型辞書の如く）コンパクトにまとまっている。

なお、当該「い」部の範囲では「いる（入る・納る・要る）」に最大22個のブランチが立てられているが、自他の区別は（それが自明であるかどうかはさておき）ともかくとして、語意がそれぞれのブランチに分けられることの根本的な説明はなく、その必然性は客観的には検証し難い。見出し語句に多義が生じる理由を説明せず、基本的に結果しか示さないのは本辞書に限った話ではないが、辞書のコンセプトからすると本辞書では実現していても良かったものであろう⁽⁵⁾。

『古典基礎語辞典』「い」部には、接頭語「い」～「因果」まで全172の見出し項目が立てられている。『雅言集覧』は「い」部だけでも約2200語を収めるため、数を比較すれば大きな差が目につくが、単純に『雅言集覧』が『古典基礎語辞典』の語彙を

包含しているわけではない。特に、『雅言集覧』では固有名詞や地名は基本的に立項しないため、その点で両者が重なることは無い。また、『雅言集覧』では「鳥獸草木のたぐひは。雅言も俗語もともに同意もおほかり。これらは。くはしうせんもふようなれば。こゝにはたゞ大かたをのみ物しつ」と凡例に書かれている通り、所謂百科項目は立項の対象とならないのが基本であり、「石」「糸」といった一般名詞も採録されていないものが多い。そして、『雅言集覧』が収録する「雅言」は基本的に中古を中心として、上代から中世前期の語句に限られるため、中世後期から近世の語彙はそもそも対象にならない。

これらを踏まえた上で、まず、『古典基礎語辞典』で取り上げられる「基礎語」が『雅言集覧』でどの程度立項されているのか、という点を確認する。

『古典基礎語辞典』及び『雅言集覧』共に立項されているのは次の 127 項目である。

い (五・五十)、い (寝・眠)、いう (優)、いうそく (有識・有職)、いか (如何)、
いかが (如何)、いかづち (雷)、いかに (如何に)、いかめし
 (厳めし)、いかる (怒る)、いき (息)、いぎたなし (寝汚し)、いきどほる (憤
る)、いきほひ (勢ひ)、いき (生く)、いく (行く・往く)、いくさ (軍・戦)、い
くばく (幾何・幾許)、いけ (池)、いこふ (憩ふ・息ふ)、いさ (感/副)、いざ
 (感)、いさぎよし (潔し)、いささか (聊か・些か)、いざなふ (誘ふ)、いさむ
 (勇む)、いさむ (諫む・禁む)、いさよふ、いざる (漁る)、いそぐ (急ぐ)、い
だく (抱く)、いたし (痛し・甚し)、いだしたつ (出だし立つ)、いたす (致す)、
いだす (出だす)、いただく (戴く・頂く)、いたつく (病く・労く)、いたづら (徒
ら)、いたはし (労はし)、いたはり (労はり)、いたはる (労はる)、いたむ (痛
む)、いたる (至る・到る)、いち (一)、いち (市)、いちしるし (著し)、いちし
ろし (著し)、いちはやし (逸速し)、いつ (何時)、いづ (出づ)、いつかし (斎
かし)、いづかた (何方)、いつく (斎く)、いづく (何処)、いつくさのたなつもの
 (五穀物)、いつくし (厳し)、いづこ (何処)、いつしか (何時しか)、いつは
る (偽る)、いづみ (泉)、いづれ (何れ)、いで (感)、いでく (出で来)、いでた
つ (出で立つ)、いと (甚・最)、いとけなし (形ク)、いとど (副)、いとどし (形
シク)、いとなむ (営む)、いとふ (厭ふ)、いとほし (形シク)、いとま (暇)、い
どむ (挑む)、いな (否)、いにしへ (古)、いぬ (犬・狗)、いぬ (往ぬ・去ぬ)、
いぬ (寝ぬ)、いぬる (戌亥・乾)、いね (稲)、いのち (命)、いのり (祈り)、い
は (岩・磐・巖)、いはけなし (形ク)、いはふ (斎ふ・祝ふ)、いはほ (巖)、い
ひ (飯)、いひいづ (言ひ出づ)、いひなす (言ひ做す)、いひやる (言ひ遣る)、
いふ (言ふ)、いぶかし (訝し)、いぶかひなし (言ふ甲斐無し)、いぶせし (鬱せ
し)、いへ (家)、いほり (廬・庵)、いま (今)、いまいまし (忌ま忌まし)、いま
さら (今更)、いましむ (戒む・誠む・警む)、います (坐す)、いまだ (未だ)、
いまめかし (今めかし)、いまめく (今めく)、いまやう (今様)、いみじ (形シク)、
いむ (忌む・斎む)、いめ (夢)、いも (妹)、いもうと (妹)、いや (弥・最・益)、
いやし (賤し・卑し)、いゆ (癒ゆ)、いよいよ (弥・愈)、いやす (伊予簾)、い
らか (藪)、いらふ (応ふ・答ふ)、いらへ (応へ・答へ)、いる (入る・納る・要

る)、いる (沃る)、いる (射る)、いる (煎る・炒る)、いる (鋳る)、いろ (接頭)、いろ (色)、いろづく (色付く)

これらの中で、『雅言集覧』と『古典基礎語辞典』の用例が一つでも一致しているものは 64 項目あるが、この数からはもちろん両者が不自然な一致を見せているとは言えない。ただし、必ずしも偶然の一致とは片づけられない事象もある。

『雅言集覧』が石川雅望の『源氏物語』研究に基づくものであることは従来の研究からも明らかであり、一方の大野晋もまた『源氏物語』研究を進めたことで知られており、その知見は随所に表れている。両者造詣の深い『源氏物語』の扱いを通じて、具体的に両辞書を比較したい。

3. 1. 用例の抜き出し方

『雅言集覧』も『古典基礎語辞典』も『源氏物語』から多くの用例を引用しているが、両者でその用例が共通している 35 項目の内実を見てみる。中古語を中心に説く上で『源氏物語』から用例を採ること自体は自然であるため、そもそも『源氏物語』に当該の語が何例あり、『雅言集覧』でそのうち何例を挙げているのか、ということが問題になる。『源氏物語』の中で 2 例しかない用例を『雅言集覧』が二つとも挙げていたら、『古典基礎語辞典』で少なくとも一つ重なるのは当たり前だからである。なお、『源氏物語』の用例数は「日本語歴史コーパス」(CHJ) を使用して確認しており、同コーパスと『雅言集覧』の利用した底本(『湖月抄』)とは異なるため厳密には重ならないものの、あくまで概略を掴むものとしては有効であると考えられる。

『古典基礎語辞典』と『源氏物語』用例が重なる 35 項目について、『源氏物語』に出てくる用例数と『雅言集覧』の挙例数、そしてその割合を巻末表 1 に示した。『雅言集覧』では『源氏物語』に出てくる用例の多くを挙げているものが少なくないが、半数近くを挙げているとすればその中の一つ二つが『古典基礎語辞典』と一致していても不自然ではない。しかし、もちろん割合だけではなく母数にもよるが、挙例率が 10% を切るものでも「いふかひなし、いでく、いち、いろ、いとほし、いま、いかに、いかめし」の 8 項目では両者が一致している。特に、「いかめし」では『源氏物語』にある 77 例中の 1 例が重なっており、『古典基礎語辞典』編纂の際に(凡例等には書かれないもの)『雅言集覧』が一定の参考資料にはなっていた可能性をうかがわせる。あるいは、『雅言集覧』から続く古語辞書の用例の系譜の中で間接的な影響を被っている可能性もあろう。もっとも、大半の用例が重ならないことからして、影響があったとしても限定的である。

用例の一致した数だけでなく、「どの範囲で切り取ったのか?」という抜き出し方についても確認しておきたい。『源氏物語』に何例あろうとも、「語句語法や分かりやすさの観点から結果的に同じ箇所を抜き出したただけだ」ということも考えられるからである。『源氏物語』用例が両者で重なる 35 項目の中でも、さらにそれぞれ複数の用例を立てていることがあるため、実際に重なっている用例は全部で 45 例になる。この 45 例のうち、『雅言集覧』と『古典基礎語辞典』の挙げている用例の引用箇所・引用範囲が完全に一致するのは次の 17 項目に一例ずつ 17 例ある。ただし、「いふかひなし」

に見られる用例は和歌なので、一首抜き出せば一致するのは当然と言える。

い、いろづく、いはふ、いちはやし、いやす、いたはり、いたはり、いたし、いたし、いつくし、いつしか、いやし、います、いま、いぶかし、いふかひなし、いでく

残りの項目で採る用例は散文からの切り取りである。そのうちの9例は『雅言集覧』の方が切り出す箇所が長く、2例は両者の間で抜き出す箇所に（核は共通しつつも）前後のズレがあり、その他は『古典基礎語辞典』の用例の方が長い、という状況である。それぞれ、具体例を見ておこう。

【両者の引用箇所が完全に一致する例】

いはふ

『古典基礎語辞典』 荒磯蔭に心苦しう思ひきこえさせはべりし二葉の松も、今は頼もしき御生ひ先、と祝ひきこえさするを
『雅言集覧』 あら磯かげに心ぐるしう思ひ聞えさせ侍りし二葉の松も今はたのもしき御おひさきといはひ聞こえさするを

【『雅言集覧』が長い例】

いちはやし

『古典基礎語辞典』 後の御心いちはやくして、かたがた思しつめたる事どもの報いせむと思すべかめり
『雅言集覧』 院のおはしましつるよこそ憚り給ひつれ後の御心いちはやくてかた / \ おほしつめたる事どものむくいせんとおほすへかめり

【『古典基礎語辞典』が長い例】

いとほし

『古典基礎語辞典』 心はうつろふ方ありとも、見そめし心ざしいとほしく思はば
『雅言集覧』 見そめし心ざしいとほしう思はゞ

【両者が前後にズレる例】

いぶせし

『古典基礎語辞典』 [中君ハ薫ノ接近ヲ] さばかりあさましくわりなしとは思ひたまへりつるものから、ひたぶるにいぶせくなどはあらで、いとらうらうじく恥づかしげなる気色もそひて、さすがになつかしく言ひこしらへなどして
『雅言集覧』 すこし世中をもしり給ふけにやさばかりあさましうわりなしとは思ひ給へりつる物からひたふるにいぶせくなどはあらで

『雅言集覧』では、親見出しと（主に存在証明を果たす）子見出しとでは用例の長さに差もあるため、単純に両者を比較することは難しい。しかし、一致例の数から見

ても、『古典基礎語辞典』が『雅言集覧』を踏襲したということではなく)『雅言集覧』の抜き出した用例が、古典語の意味を明確にすべく編まれた現代の辞書の抜き出し方に遜色ないレベルである」ということを改めて確認することができる。

3. 2 補足態度について

ここで、『古典基礎語辞典』における用例への補足態度も確認する。前述の通り同書は「[]」を使って文脈などを補足しており、用例の中略も適宜見られる。このことから、存在証明としての用例ではなく語義の理解を助ける用例が求められる中で、そもそも補足・省略を入れなければ通じ難い用例は適切な用例たり得るのか?という疑問が浮かぶ。『雅言集覧』でも適宜補足や省略があるため、用例の抜き出し方に親和性のある両書を更に比較してみる⁶⁾。

『古典基礎語辞典』では、「[]」「…」を用いて発話者や動作主・動作の対象、文脈の補足が為されている。このような補足は19項目22例に見られる。数例示す。

いかに [朱雀院ガ女三宮ヲ思ッテ]『耳やすき物から、さすがに、ねたく思ふことこそあれ』とのたまはする御気色を『いかにのたまはするにか』と、[夕霧ガ]あやしく思ひめぐらすに
いつくし [光源氏ハ]うるはしだちで、はかばかしき方に見れば、いつくしくあざやかに目も及ばぬ心地するを
いはけなし [朧月夜君ノ心中]わが心の若くいはいはけなきにまかせて、さる騒ぎをさへひき出でて、わが名をばさらにもいはず、人[光源氏]の御ためさへなど思し出づるに、いとうき御身なり
いろ [帝ハ若宮ヲアラタメテ春宮ニ立テタイト希望スルガ]御後見すべき人もなく、また世のうけひくまじきことなりければ、なかなかあやふく思しはばかりて、色にも出ださせたまはずなりぬるを

また、3項目4例において「…」を用いた中略が見られる。1例示す。

いま 今朝風邪おこりて悩ましげにしたまへるを……今の間まいかにと聞こえたりつるなり

その中には「[]」「…」がともに用いられる例も2例あり、「…」で省略した箇所を「[]」を用いて要約したものも見られる。

いかる 律師……[物怪モノノケガ我ガ御修法デ退散シナイコトハナイ]と、声は噎れていかりたまふ

これらに対して、当該範囲における『雅言集覧』の状況は次の通りである。まず、補足は7項目7例に見られるが、4例は下のようにならに文が後続することを示すだけのものである(【 】は本文と表記に差異の見られる注記部分を表す)。

いろづく さきの方すこしたりていろづきたる事【云々】
いかめし 山水のつらにいかめしき堂をたてゝ三昧行ひ【云々】

また、『古典基礎語辞典』で多く見られる動作主や動作の対象を示す補足は行われていない。「いつしか」の項目では次の如くである。この項目は、『古典基礎語辞典』では「[紫上ハ]」を頭に補っている。

いつしか いつしかひゝなをとしすゑてそゝきみ給へり

発話者を表す補足としては、次のものが見られるのみである。

いかる 【僧詞】 悪らうはしふねき物なればどつしやうにまつはれたるはかな物
なりと聲はかれていかり給ふいとすくゞしき律師にて

この例は、『古典基礎語辞典』と同様の志向が表れていると言えよう。巻末表1にあるように、「いかる」の項目は『源氏物語』にある6例中5例を『雅言集覧』が挙げているため、『古典基礎語辞典』と用例が重なること自体は当然あり得るものであるが、「僧」の発話であることを示しつつ、文脈上必要な部分を（『古典基礎語辞典』の場合は分かりやすく口語でまとめて）引用している点が共通している。

最後に、『古典基礎語辞典』および『雅言集覧』を比較する中でやや不審な例を挙げておきたい。それは「いぶせし」の項目に見られるのだが、両書においてそれぞれ次のように記されている。

『古典基礎語辞典』[光源氏が声ヲカケルト葵上ハ] いよいよ御衣ひき被きて臥したまへり。などかく いぶせきもてなしぞ
『雅言集覧』 いよ / \ 御ぞ引かづきてふし給へり云々などかくいぶせき御もてなしぞ思ひの外に心うくこそおはしければ

『古典基礎語辞典』が冒頭で文脈を補う一方で、『雅言集覧』は中途に「云々」を挟みつつ後ろにかけてやや長い引用をとっている。この箇所はそれぞれの引用の仕方の特徴が表れているだけのようにも見えるが、『古典基礎語辞典』では『雅言集覧』で「云々」とされる部分に何も記載が無いことが分かる。『源氏物語』では、当該箇所は次のように記されている（CHJが利用する『新編日本古典文学全集』より引用）。

いよいよ御衣ひき被きて臥したまへり。人々は退きつつさぶらへば、寄りたまひて、「などかくいぶせき御もてなしぞ。思ひの外に心憂くこそおはしければ。人もいかにあやしと思ふらむ」とて、

この箇所について諸本で異同は無い。たとえ『古典基礎語辞典』の引用本文に大野

晋独自の解釈が入っているとしても穏当な読みとは言えず、主語の入れ替わるこの改変は考えにくい。すなわち、『古典基礎語辞典』の当該用例に脱文があると考えるのが自然である。膨大な用例を扱う上でミスは当然生じ得るものであるが、その結果、「云々」で途中省略を入れた『雅言集覧』と同じ形で引用することになっている。『雅言集覧』にある「云々」が抜けていることを踏まえれば、『雅言集覧』以降『古典基礎語辞典』以前の近現代辞書との比較も改めて必要となってくるのが分かる。

4. 『倭訓栞』との関わり

筆者はこれまで、『雅言集覧』の編纂において先行する辞書『倭訓栞』が大きな影響を与えていることを指摘してきた（平井 2018 など）。『倭訓栞』には節略前の大部な写本も残されているが、『雅言集覧』編者の石川雅望が見ていたのは刊行に際して分割・節略された整版本『倭訓栞』前編だということも分かっている。そこで、整版本『倭訓栞』前編「い」部を対象を拡大して、本調査範囲の項目が『雅言集覧』および『倭訓栞』でどのように立項されているかをまとめた（表 2）。

まず、『古典基礎語辞典』に立項されていて、『倭訓栞』に立項されていない項目（表 2 『倭訓』無い）は 64 項目である。また、同じく『雅言集覧』に立項されていない項目（同『雅言』無い）は 45 項目ある。個々に見ると『倭訓栞』『雅言集覧』それぞれ多くの項目が立項されていないことになる。ただ、『雅言集覧』が『倭訓栞』を意識して編纂されており、限られた紙幅の中で『倭訓栞』の参照も前提にしていたことを踏まえると、ここでも両者を合わせて考える必然性が生じる。すなわち、『雅言集覧』が『倭訓栞』の挙げていない項目のうち 40 項目を挙げており（同『雅言』のみ）、空見出しを含めた『古典基礎語辞典』「い」部所収 172 項目のうち、『倭訓栞』と『雅言集覧』で 150 項目（約 87%）をカバーしていることが分かる。さらに、そこから固有名詞と『古典基礎語辞典』において中世以降の用例しかないものを除くと、『倭訓栞』及び『雅言集覧』で立項されていない項目は次の 7 項目に留まることになる。

いうげん	幽玄
いつ	五つ
いつまきのひ	五巻の日
いとのかて	
いぬ	戌
いらふ	借ふ
いんぐわ	因果

裏を返せば、『倭訓栞』及び『雅言集覧』は、『古典基礎語辞典』が挙げる基礎語の中から固有名詞と比較的時代の新しい語を除いたものの 9 割以上の語句を立項していることになる。個々に見ると必ずしも網羅的でない『倭訓栞』及び『雅言集覧』が、補い合って真価を発揮するものであることが改めて確認できるのである。このことは、漠然と両者だけを比較していても分かるものではないが、そこに『古典基礎語辞典』という指標を入れることによって初めて見えてくるものがある。

なお、この7項目のうち「いとのかきて」以外は『倭訓栞』の節略前の姿を示すとされる写本・清逸本『倭訓栞』においても立項されていない。収録項目に制限のある整版本『倭訓栞』前編に無いのはもとより、そもそも『倭訓栞』編纂にあたって選定の対象外であったものであったということになる。『倭訓栞』『雅言集覧』が所謂基礎語を積極的に採用していたことを考えると、基礎語の認定の仕方が『古典基礎語辞典』とズレているのだと考えられる。

『倭訓栞』『雅言集覧』ともに漢語は積極的な収録対象ではないため、「いうげん」「いんぐわ」が載らないことに少なくとも不自然さはない。なお、『雅言集覧』「そらひじり」の項目では、『今物語』を引いた中に「幽玄なる信の出あひたりければ」というフレーズが見られるため、石川雅望が「いうげん」を知らなかったというようなことではない。「五つ」についても、複合語の中では「いつ」を含む語句を『倭訓栞』『雅言集覧』ともに収録しているため、「完全に同じ形の見出し項目を有しているか否か」という点を含めて『古典基礎語辞典』との本質的な差はかなり限定的になる。

5. まとめと課題

辞書において、語義のブランチの立て方が（その根拠を示さずに）結論の提示に留まっていることには、日常的な実用性はともかくとして辞書史上・辞書研究史上の大きな弊害がある。「なぜこの語は五つのブランチを立てる必要があるのか」という議論の過程が見えないことで、辞書を発展的に継承していくこと、或いは継承の過程を追うことが難しいからである。結論として示されただけの語義区分の変遷を追う際に、カギを握るのは間違いなく用例の扱いであるが、各ブランチに対応した用例が古典作品の中にどれくらい見られるのか？ということ客観的に数値化することは難しい。紙幅の都合もあり、示した用例以外の全てを当該辞書のブランチに位置付けることはできないからである。

そのような中で、本稿では基礎語という異なる指標を添加することの有効性を見ることができた。基礎語の認定自体に難しい点があるものの、現代において出現頻度を中核に据えて設定された基礎語が、近世辞書でも結果として同様に重視されていたことが分かった。今後、指標としての用例と基礎語を立体的に掛け合わせるとともに、『源氏物語』以外の典拠の扱いも含めて複合的に考察を進めることが必要であるが、『雅言集覧』が『倭訓栞』を意識していたということは今回の調査からも補強できたであろう。

『古典基礎語辞典』は古典作品における出現頻度や「バランスなどを考慮」して収録項目を精査した結果、「群」として捉えたときの近世辞書の収録項目と意義深い重なりを見せた。近世辞書が「古典基礎語」というものを感覚的に把握していた蓋然性も高い。特に、『倭訓栞』は書肆から要請を受けて節略および前・中・後編への分割出版に踏み切るが、前・中・後編への振り分け方には単純ではない部分も多く、多くの謎を孕んでいる。その中で、『古典基礎語辞典』との比較で立項されていなかった項目が清逸本や中編・後編でも大半が不掲出であることが分かり、基礎語を前編に優先的に載せていたことも改めて見えてきた。近世でも現代でも基礎語のような概念が緩

やかに共有され、古典の読解においてそれを中核に据えること自体が近世から続いていたのだとすれば、「網羅的な辞書ではないから使い難い」という『古典基礎語辞典』への認識も変わってくるであろう。そして、現代において細かい数値を算出した上で導き出された「古典基礎語」について、近世辞書が同様のものを直観していたことは改めて近世辞書の水準の高さを示しているのである。

【注】

- (1) もちろん、古典語コーパスの整備が進むにつれて「使用度数」の値も補正されていくはずであるから、随時大野晋の見通しや事績は検証されていくべきものであろう。
- (2) なお、池澤夏樹編『日本語のために』（池澤夏樹＝個人編集 日本文学全集 30、河出書房新社、2016）には、本辞書の一部が抜粋されている。
- (3) もっとも、辞書が（新刊・改訂の折であっても）学術的に評価されることがほとんどないのは『古典基礎語辞典』に限った話でもない。
- (4) なお、編纂の経緯から『古典基礎語辞典』は『岩波古語辞典』の姉妹版と言われることもあるが、『岩波古語辞典』との比較も含めた検証については稿を改めて論じたい。
- (5) そもそも、『古典基礎語辞典』は体系的に古典語を立項しているわけではないため、読み物として読み進めたり、特定の語に関して詳細な参考意見を得たいがために引いたりするものである。ブランチの立て方を含めて、この辞書が提示した一解釈を「正解」として受け止め、採用するしないは全て利用者に委ねられているため、大野晋に賛同する者だけでなく、批判的に捉える者をも対象にする場合、客観的に思想を検証できる手段があれば良いことは論を俟たない。
- (6) 『雅言集覧』では、文脈や発話者を小書き・カタカナで示したり、「云々」を用いて省略を示したりしている。

【参考文献】

- 大野晋（1956）「基本語彙に関する二三の研究—日本の古典文学作品に於ける—」（『国語学』24）
大野晋（1971）「平安時代和文脈系文学の基本語彙に関する二三の問題」（『国語学』87）
大野晋編（2011）『古典基礎語辞典』（角川学芸出版）
平井吾門（2018）『『雅言集覧』に見られる『倭訓栞』への意識—百人一首歌および『倭名類聚抄』の扱いを通して—」（『国語と国文学』95-2）
国立国語研究所（2022）『日本語歴史コーパス』<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/>（2022/1/30 確認）
『雅言集覧』国立国会図書館デジタルコレクション所収請求記号 837-79
『倭訓栞』製版本前編（架蔵本）・清逸本（石水博物館蔵本）

【付記】

本研究は JSPS 科研費 20K00651 の助成を受けたものです。

見出し語	漢字表記等	源氏用例数	雅言挙例数	雅言使用率(%)
い	五・五十	4	2	50
いう	優	6	5	83.3
いうそく	有識・有職	12	5	41.7
いかに	如何に	452	9	2
いかめし	厳めし	77	1	1.3
いかる	怒る	6	5	83.3
いぎたなし	寝汚し	5	4	80
いきほひ	勢ひ	38	4	10.5
いさよふ		1	1	100
いたし	痛し・甚し	48	14	29.2
いただく	戴く・頂く	3	1	33.3
いたはり	労はり	8	4	50
いち	一	27	2	7.4
いちはやし	逸速し	4	3	75
いつかし	斎かし	6	4	66.7
いつく	斎く	7	4	57.1
いつくし	厳し	17	8	47.1
いつしか	何時しか	34	7	20.6
いでく	出で来	139	11	7.9
いとほし	形シク	387	11	2.8
いとま	暇	34	7	20.6
いのち	命	124	14	11.3
いはけなし	形ク	59	6	10.2
いはふ	斎ふ・祝ふ	6	5	83.3
いぶかし	訝し	17	7	41.2
いふかひなし	言ふ甲斐無し	94	8	8.5
いぶせし	鬱せし	50	10	20
いま	今	851	20	2.4
いまいまし	忌ま忌まし	10	6	60
います	坐す	5	5	100
いまめく	今めく	24	5	20.8
いやし	賤し・卑し	16	5	31.3
いやす	伊予簾	2	1	50
いろ	色	213	9	4.2
いろづく	色付く	10	6	60

【表 1】

【表2】	見出し語	「使 訓」無	「兼 言」無	「兼 言」の 訓」の	「使 訓」の ある	両方あ る	両方無 い	見出し語	「使 訓」無	「兼 言」無	「兼 言」の 訓」の	「使 訓」の ある	両方あ る	両方無 い
	い (雑語)		●		●			いでば (出明)		●				
	い (五・五十)							いと (糸)		●		●		
	い (兼・殿)					●		いと (兼・兼)					●	
	い (兼)	●		●				いとけなし (形ク)					●	
	いづげん (幽玄)	●	●				●	いとし (聚し)	●	●				●
	いぞそく (有語・有職)	●		●				いとど (副)					●	
	いか (如何)	●						いとどし (形シク)					●	
	いが (伊賀)		●		●			いとなむ (嘗む)					●	
	いかが (如何)					●		いとのきて (副)	●	●				●
	いかづち (兼)					●		いとふ (取ふ)					●	
	いかで (如何で)	●		●				いとほし (形シク)					●	
	いかに (如何に)	●						いとま (兼)					●	
	いかめし (傲めし)	●		●				いどむ (扱む)	●		●		●	
	いかる (怒る)					●		いな (否)					●	
	いさ (色)					●		いなば (両稱・梅羽)		●		●		
	いさ (香球・香夜)	●	●			●		いにしへ (古)					●	
	いざたなし (嫁汚し)	●		●				いぬ (犬・狗)					●	
	いまだほる (積る)	●		●				いぬ (成)	●	●				●
	いまだひ (積ひ)					●		いぬ (達め・去ぬ)					●	
	いさ (兼く)					●		いぬ (兼ぬ)					●	
	いく (行く・往く)					●		いぬみ (伊賀・越)	●		●		●	
	いくくひ (活代)	●	●			●		いぬ (偏)					●	
	いき (兼・載)					●		いのち (命)					●	
	いくばく (幾何・幾許)	●		●				いのり (祈り)	●		●			
	いけ (池)					●		いは (兼・誓・歳)					●	
	いごふ (怒ふ・息ふ)					●		いはき (石敷)	●	●				●
	いき (感/節)					●		いはけなし (形ク)	●		●			
	いざ (感)					●		いはしろう (石背)	●	●				●
	いさぎよし (潔し)					●		いはしろう (兼代・替代)	●	●			●	
	いささか (耶か・悲か)					●		いはすひめ (石黒比奈)	●	●			●	
	いざなき・いざなみ (伊那那味・伊那那夫)	●	●			●		いはせ (石背)	●	●			●	
	いざなふ (誘ふ)					●		いはつちびこ・いはすひめ (石土鹿吉・石黒比奈)	●	●			●	
	いざなみ (伊那那美)	●	●			●		いはながひめ (石長比奈)	●	●			●	
	いさむ (勇む)					●		いははしる (石走る)	●	●		●		
	いさむ (兼む・嘗む)					●		いはひべ (兼兼)		●		●		
	いさよふり	●						いはふ (兼ふ・祝ふ)					●	
	いざる (減る)					●		いはは (兼)					●	
	いし (石)					●		いはみ (石見)	●	●		●		
	いし (兼シク)		●		●			いひ (偏)					●	
	いしこりどめ (石凝壁)	●	●			●		いひひづ (言ひ出づ)	●		●			
	いせ (伊勢)	●	●			●		いひなす (言ひ換す)	●		●			
	いそ (兼)					●		いひやる (言ひ譲る)	●		●			
	いそぐ (兼く)					●		いふ (言ふ)					●	
	いたいけ (効氣)	●	●			●		いふかし (訝し)					●	
	いたく (控く)					●		いふかひなし (三ふ申敷無し)	●		●			
	いたし (兼し・兼し)	●		●				いふせし (懸せし)					●	
	いたしたつ (出だし立つ)	●						いへ (家)					●	
	いたす (数す)					●		いほり (兼・庵)					●	
	いたす (出だす)	●		●				いま (今)					●	
	いたたく (兼く・頂く)	●		●				いままし (忌ま忌まし)			●			
	いたつく (兼く・旁く)					●		いまさら (今更)	●					
	いたづら (笑ら)					●		いましむ (戒む・扱む・嘗む)					●	
	いたはし (傍はし)					●		います (坐す)					●	
	いたはり (傍はり)					●		いまだ (未だ)					●	
	いたはる (傍はる)					●		いまめかし (今めかし)	●		●			
	いたむ (兼む)					●		いまめく (今めく)	●		●			
	いたる (兼る・到る)					●		いまやう (今様)	●		●			
	いち (一)	●		●				いみじ (形シク)	●					
	いち (巾)					●		いむ (忌む・兼む)					●	
	いちしるし (審し)					●		いめ (兼)					●	
	いちしろし (審し)	●		●				いも (字)		●		●		
	いちはやし (洗濯し)					●		いも (兼)					●	
	いづ (五つ)	●	●			●		いもとう (兼)					●	
	いづ (兼成・兼)					●		いや (兼・兼・兼)					●	
	いづ (兼時)					●		いやし (兼し・兼し)					●	
	いづ (伊賀)		●		●			いゆ (兼ゆ)					●	
	いづ (出づ)					●		いよ (伊予)		●		●		
	いづかし (審かし)	●		●				いよいよ (際・意)					●	
	いづかた (兼方)	●		●				いよす (伊予兼)			●			
	いづく (兼く)					●		いよのゆ (伊予湯)	●	●				●
	いづく (兼他)	●		●				いらか (兼)					●	
	いづくきのたなつもの (五穀物)					●		いらす (質す)		●		●		
	いづくし (兼し)					●		いらつこ (部子)		●		●		
	いづくしむ (兼む)		●		●			いらつめ (部女)		●		●		
	いづこ (兼他)	●		●				いらふ (兼ふ・兼ふ)	●		●			
	いづしか (兼時しか)					●		いらふ (兼ふ)	●	●				●
	いづつきぬ (五夜)	●	●			●		いらへ (兼へ・兼へ)					●	
	いづはる (兼る)					●		いる (入る・兼る・兼る)					●	
	いづまきのひ (五善の日)	●	●			●		いる (入る)	●		●			
	いづみ (兼)					●		いる (兼る)					●	
	いづみ (和兼)		●		●			いる (兼る・兼る)					●	
	いづも (出兼)		●		●			いる (兼る)					●	
	いづれ (兼れ)					●		いろ (兼兼)					●	
	いで (兼)					●		いろ (色)					●	
	いでく (出で兼)	●		●				いろづく (色づく)	●		●			
	いでたつ (出で立つ)	●		●				いんぐわ (因那)	●	●				●